

サーキット・ライダー 2003年12月

マリアとヨセフ

イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れずに妻マリアを迎え入れなさい。…」ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ、男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた。

マタイ 1 : 18 - 25.

マタイ 1 : 18 - 25.

ニューヨーク、ニュージャージー、コネチカットにある8つの日本人及び台湾人教会、伝道団体が協力し合い、今年の春から7ヶ月かけて準備した三浦光世氏の講演会が10月の中旬に実現し、多くの方が講演会に集いました。講演旅行中、三浦さんと秘書の宮嶋裕子さんは、荒美さんご夫妻のご好意で、荒美家に滞在されました。この場をお借りし、改めて荒美ご夫妻のご好意に感謝いたします。また講演会の実現の為に献金を捧げて下さった方々、お祈りして下さいました皆様に心より感謝いたします。お陰さまで恵まれた講演会になったことは勿論のこと、お二人と個人的な交わりもすることができ、講演会及びプライベートな時間に色々感銘を受けるお話を伺うことができました。一度でも故三浦綾子氏の作品を読まれた方は、作品の中に流れる「信仰」「愛」に打たれ感動し、純粋な気持ちになり、自分の生き方を問い直した経験があるのではないのでしょうか。今回、お二人そしてお二人の語る三浦綾子像から多くの事を学び感銘を受けましたが、クリスチャンとして生きる上で最も大切な「謙虚さ」「愛」そして三浦綾子、光世夫婦に見る「マリアとヨセフ」像を書かせて頂きたいと思います。

三浦光世氏はいわゆる著名人ですが、奢り高ぶるところが全く無く穏やかで、その謙虚な姿勢が何も言わずとも接する者に伝わってきました。勿論、妻綾子さんの小説、闘病と信仰、作品誕生の逸話が中心テーマですから、光世さんが表に出ないのは当然かもしれませんが、闘病中の綾子さんとの出会いからずっと支えてきたのは他でもない光世さんです。彼の存在なくして小説家三浦綾子はあり得なかったと言っても言い過ぎではありません。しかし光世さんは綾子さんを妻として、作家として心から尊敬し、彼女をずっと立ててきました。そこには「私がいたから、綾子は世に出られた。」というような俗物根性は全くありませんでした。私達はともすると、少しのことでも自慢したくなります。傍から見ると取るに足らないことでも。その意味では三浦さんの謙虚さを見習わねばならないと思いました。

妻綾子の才能を信じ、ずっと支え続け、しかしながら自分はいくまでも謙虚である。その生き方に滲み出ているのはイエスのように生きようとされている信仰であり、イエスの愛であると強く感じました。「信仰」「愛」と一言で言うのは簡単ですが、実際、「自分さえ良ければ」という自己中心の生き方をして神を立てず、隣人（妻、夫、父母、子、友人、助けを必要としている人々）を立てずに生きている人間のなんと多いことか。クリスチャンも例外ではありません。使徒パウロは「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」（コリントの信徒への手紙 13：4－7。）と言っていますが、何と読むに易く実行するに難しい言葉だろうと自分を振り返りつくづく思います。今回お会いして三浦さんの綾子さんへの愛はこのパウロの奨めを地で行ったのだと確信しました。

そんな三浦さんの生き様は正に「マリアを見守り受け入れたヨセフだ。」と私は思いました。モーセの立法(申命記22章)よると婚約者、夫以外の子供を身ごもった場合は死罪になります。それを望まないヨセフはマリアを密かに離縁しようとしていました。その後「夢のお告げ」で子供が聖霊によるものだと言われた時、彼はそれを信じてマリアを迎え入れました。もし彼がマリアを心から愛していなかったら、神を信じていなかったら「そんな馬鹿なことがあるか!」と現実的に振舞いマリアは死罪となつたでしょう。しかしヨセフはマリアを守りました。ヨセフは聖誕物語と宮詣で物語以外聖書に出てきません。しかし彼の信仰があったからこそマリアは生きることができイエスも生まれ、神の救いが成就しました。そんな健気でひた向きのヨセフ的信仰を今回三浦光世氏に見ることができ感謝の心で一杯です。 吉松 純